
雨 昂式雲幻物語 『人の恋路を邪魔するなんて許せない！でも見るだけなら構わないよね？』

クマ

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

銀雨 昂式雲幻物語 『人の恋路を邪魔するなんて許せない！でも見るだけなら構わないよね？』

【Nコード】

N7238P

【作者名】

クマ

【あらすじ】

世界の秩序を守る戦いを日夜繰り返す少年少女が通う学校、銀誓館学園。

今回繰り返される話はそんな事とは全く関係ない馬鹿話。面白いことがあったら首を突っ込むのが人の性。そしてそこで事件を起こしてしまうのが昂式雲幻の運命。はてさて、今回はどんな目にあってしまうのか……？

冗談な話の展開はさておき、本人はいたって真面目のようだ。まあ、頼られるのは悪くない。

せっかくわざわざ来てくれたんだし、相談に乗ってあげるか。俺はため息をひとつつきながらも成都君の話を聞いた。

「じつは、クラスに好きな女の子がいてアタックしたいんですけど、どうすればいいかわからなくて……」

「そっかあ……初恋？」

「はい、だからどうすれば彼女が喜んでくれるのかわかんないんですよ」

「大変だな、頑張れよ」

「はい……てえ!？」

成都君は焦ったような表情で立ち上がる俺の服を掴んだ。

ちっ、だめだったか。

「話聞いただけですか!？」

「馬鹿もん！自慢じゃないが彼女はいるがまともにイベントに参加したことなんてちょっとしかないし会話以外何もしとらんわ！むしろ俺にどうすればいいか教えてくれ!」

うん、我ながらなんと情けない言葉か。

これが一年以上付き合ってる彼女がいる男のセリフかね。

……うん、本当にゴメン。

「そ、そんな……お願いします、この通り!」

なんか俺の目の前で土下座を始める成都君。

もちろん教室には他の生徒もいるから超迷惑、主に俺の。

「ちょ、あの、えー……」

その反応にはもちろん困った。

助けて上げようにも俺にはそこら辺の知識が全くない。

あるとしたらアレくらいなもんだしなあ……。

「ん?」

いや、アレなら参考になるんじゃないか?

一応恋愛ではあるし……。

「いけるかもしれない……」

「本当ですか！」

しまった、ついいつもの癖で余計な言葉が口から出てしまった。だがそれに気づいてもあとのまつり、成都君は必死に形相で俺に迫ってくる。

「何か、方法は!？」

「顔近い息荒い口臭い!!!落ち着け成都君、これには少し時間がある。二日……いや、三日待ってもらえるか？」

「はい、もちろん!それでうまく行くなら!」

いや、まあそれでうまくいくかわかんないんだけどね。

とりあえず俺は成都君から彼女の知ってる情報を聞き出してから帰らせた。

やれやれ、なんかめんどくさいことになったもんだ。

こりやしばらく徹夜かな？

そして約束の三日後、俺は成都君に一枚のメモを渡した。

「雲幻先輩、これは……」

「とりあえず、話を聞いてるとある程度のアタックはしているいい友達級にはなっているみたいだ。友好度が上がって話しやすくなってるなら、そこからは好感度を上げる行動、デートのみだ」

俺が渡したメモには成都君にお勧めのデートプランが入っていた。作るのマジ苦労した!。

なんだがやり遂げた顔をする俺とは対照的に、成都君はさらっと言った言葉に反応してうるたえはじめた。

「で、でででデートですか!？」

「怖気づく少年、君が望むのはそういう仲だろ」

「ま、まあそうですね……」

成都君はメモを見つめながら顔を真っ赤にし、なんかよく見る

と目がぐらぐら左右に揺れている。
あかん、この子すごく動揺しているわ。
どうにかして自信をつけないと。

俺はこほんと一咳するとまじめな顔で成都君に問いかけた。

「成都君、君は自分のことをどう思っている？」

「僕は……見た目もさえないし、成績も真ん中より少し上くらい、
運動もそこそこ出来る程度で取り柄なんて全くありません。だから、
彼女が僕に振り向いてくれるかどうか心配で……」

自分のことを言う度に表情を暗くする成都君。

その気持ちはよくわかる、俺だってそうだった。

だが、この銀誓館での生活が俺を変えていた。

「成都君、それは違うぞ」

「え？」

「人が人を本当に好きになるのにステータスは関係ない。初対面で
会う相手ならそういうのも必要だが君はその難関をすでに突破して
いる。そこからどう進むかは君がどれだけ真剣に彼女のことを愛し
ているかだ。君は彼女への思いにも自信がないのか？」

「そんなことはありません、僕は彼女のことを真剣に……！」

「ならその自信を、想いを、彼女にぶつけるんだ！」

俺は成都君の肩を強く掴んだ。

その行動にびっくりしながらも成都君は目をそらさずに俺を見て
いる。

「人が本当に人を好きになるのは、その人の頑張りや一生懸命さが
伝わった時だ。彼女への自信を持っている君ならやれる、君なら出
来る！」

「昂式先輩……」

俺は成都君の体を一八〇度回転させてぱしつと背中を叩いて送り
だした。

「行ってこい少年、ぱっちりカッコよく決めるんだ！」

「……はいっ！」

成都君は今まで見たことのない引き締まった顔で頷いて出て行った。

今の彼なら何の問題もないだろう。

そう、俺の仕事はここで終わった。

あとは……報酬だけだな。

そんなことを考えて、俺は思わず口元に笑みを浮かべてしまっていた。

人の恋路は覗くものだ：準備編

えー、ただいま我々は成都君が彼女とデートする予定の遊園地前に来ております。

このデートが面白い方向に、もとい良い方向に進んでいるかを守るために我々メンバーがそろったわけです。

ちなみにメンバーは私、昂式雲幻と、

「……なんで俺がここにいるんだ」

とぼつちり隊員、水無月神^{みなづきしん}。

もうあからさまに嫌そうな顔がこの遊園地に合わない合わない。

「なーに暗い顔してるんだよ、遊園地だぞ遊園地。もっと楽しんでいこうぜ」

俺がそう言ってもやっぱり神はぶすつとした顔のまんまだった。

ええい、テンション低い奴め。

「相手がお前じゃなく、なおかつ来る目的が遊ぶためだったらもっと楽しむさ」

もちろん神には事前に何のためにここに呼んだかは教えている。

と、いつか教室でにやにやしているとところを見られて強制的に話をさせられました。

そんなやばい顔してたのか、俺？

話をしたあとに一人じゃいろいろ大変だろうから強制連行して連れてきたってところだ。

「で、俺が呼ばれた理由は何なんだ？」

「ああ、あれあれ」

「ん？」

神は俺が指さした方向に何気なく顔を向けた。

そこには一つの看板があり、そこにはこう書かれていた。

『カップル割引』

一瞬にして神が引いた。

「……悪いが俺にそんな趣味はない」

「俺にもねえよ！ただこうしたほうが入場料やすくなっただけで出費が減るんだよ！」

「俺の出費が増えるのに何か言うことはないか？」

「メンゴメンゴ、それじゃあ準備するからちよつと待っていてくれ」
「準備？」

そこで神は俺が背中に何か荷物を入れたりリュックサックを背負っていることに気付いた。

なかなかのふくらみがあり、見ただけでけっこうな荷物が入っていることが分かる。

「俺だつて男同士で行つて『カップルです』で通れるほど甘いもんだとは思つとらんわ。まあ待つてろ、すぐ終わる」

そういつて俺は首を傾げる神を置いて近くの公衆トイレの中に入つて行つた。

……それから十分後。

「お待たせえ〜」

「遅かつた……な……」

そんな俺の声を聞いて振り向いた神は、しばらく固まつたあとに渋い顔をして頭を抑え始めた。

「……どうした？」

「こんなやつをライバル指定してる自分が情けなくて情けなくて……
……というか、お前女装は自分でも嫌がつてたたる！？」

そう、今の俺は女装モード（メイド服バージョン）。

衣装が変わると顔も変わる不思議な能力。

「面白いことのためならば、時には自分を犠牲にしなきゃいけない時があるんだ。あ、もちろん中入ったら着替えるからな？」

「いいのとお前はそれで……」

神は色々と頭を抱えていたがターゲットの二人が来る前に中に入つておかなければ。

着替えている最中に中に入って見失ってしまったては探すのは困難だ。

とつとと入園しないとな。

俺はカッブルに見えるように神の腕に嫌々ながらつかまって受付まで行った。

ちなみに難なくスルーだった。

我ながらこれでいいのかと思うが、受付のお姉さんが笑顔でスル―したんだからこれでいいんだろう。

とりあえず自分を捨てないようにすれば問題ない。

……うん、がんばろ。

「よし、じゃあ着替えてくるから」

「早くそうしてくれ、頭痛くてしょうがないから」

全く軟弱な奴め、俺もそうだが。

そしてそれから5分後。

やはり脱ぐのは楽ですぐに着替えは終わった。

もう一つの準備も終わったし、俺はトイレから出てきて神のところにもどった。

「お待たせー」

「おかえ……………」

なんか神が振り返った瞬間に今度は完全に固まった。

まあ、こんな姿をしていれば当たり前だろう。

「……………フイ」

「ん？」

「おまえ、なんで起動イグニッションしてるんだ？」

そう、今の俺は戦闘形態になるためにイグニッションカードを発動しているのだ。

まあ知らない人に教えるならば俺たち能力者の力というのは日常では一枚のカードの中に封印されている。

それを発動させることで身体能力は数段に上がり特殊な能力が使えるようになるのだ。

その効果発動時には戦闘用の装備も身に纏うことが出来るが、普通の人ならそれでもパと見はすこし派手な服程度にしか見えない。

だが俺の場合は違った。

ごつつい黒い装甲に身を包み、肩には大きな武装も背負っている。まるでスーパードット 戦に出てくる人型兵器のような姿であった。

正直日常的に見ても、遊園地のファンタジー視線から見てもいやいけない存在感を明らかに全身からあふれ出している。

「そんな姿、一般人に見られたら大変だぞ!？」

もちろん普段冷静な神は焦って俺に怒鳴り上げる。

が、俺だって無意味にこんな姿をさらしているわけではない。

「ふつつふ、大丈夫だ。こんな時のためにメインジョブを魔剣士にしておいた。これでジョブ能力『闇纏い』が発動出来る!」

闇纏いとは一般人の目や鏡、カメラなどにも一切姿が映らなくなる。

つまり日常世界の住人たちには一切こちらの姿が見えなくなるのだ。

「……最初からそれで遊園地に侵入すればよかったんじゃないか？」

「お金払わずに遊園地に入れと言うのか!? 犯罪はいかんぞ!」

「勝手に他人を尾行するのめなかなか怪しいものではあると思うがな。で、そのあとどうするつもりだ」

「これを使うのだ」

そういつて神の目の前に差し出したのは長剣。

俺の詠唱兵器倉庫の中に眠っていた何の変哲もない剣だ。

「シルバーレインTRPG版、武器覚醒『闇送り』の効果発動! 武器レベルが30以上ならば気WBの半分の数値の人数の能力者に闇纏いの効果を使うことが出来るのだ!」

「いいのか、ここでそんなこと言って!？」

「問題ない、なぜならこの小説はギャグだから!!!」

何だか恐ろしくカオスになってる気がせんでもないが、それは気にしないでおこう。

「欠点はゴーストや能力者にはばっちり見えちゃうことだが、まあ

「そう簡単に能力者に会ったりしないだろ」

「本当にそうか？学園人数確認してみろ、約8万人だぞ」

「あの学園絶対特殊空間出来てるよな……」

まああの学園の謎は置いといて（絶対解明出来ないから）、俺は長剣の能力を使って神に闇纏いを使うことに成功。

あとは二人が来るのを入口で待つだけだ。

さてさて、どうなるかなあ

人の恋路は覗くものだ：突入編

よし、ちゃんと予定通りの時間に間に合ったみたいだな。

成都君は嬉しそうな笑顔を浮かべてエスコートしており、彼女の方も少し顔を赤くしながら一緒に進んでいる。

それはぎこちなさが少し見えながらも、空気はすでに周りにちらほら見えるカップルと同じ空気をまとっているようにも見える。

っていうか……

「なんだろう、空氣的に今告つても成功しそうなあの感じ」

「別に様子見なくてもいいんじゃないか？」

「それじゃあ面白くな……もとい、つまらんだろ!？」

「言葉変えてるが言ってることが変わってないぞ」

ええい、わざわざ金払って100%成功のシナリオ見ても詰まらん。

こうなったらイグニッション状態で邪魔しに行ったりするか？

いや、早まるのはよくないな。

ここは少し様子を見て成都君のエスコートを観察しよう。

…… 2時間後。

俺は早々とイグニッションを解いてぶすうっと不機嫌な顔になってベンチで昼食をとっていた。

少し離れた広場では成都君たちが彼女お手製のお弁当を広げて仲良く食べさせっこなんかしている。

つまらん、正直つまらん。

「なんだあの最初っからラブラブパワー全開は。自分で計画しておいてなんだけどすっげえ見てて腹立つ」

「お前は応援したいのか邪魔したいのかどっちなんだ？」

あきれた表情でジュースを飲みながら神が言ってきた。

いや、だってお？

「成都君に会った時はそれはそれは照れっ照れのへたれ男だと思っ

たわけよ。だからいくつかの資料を使ってプラン立てたわけよ。そしたら箱をあけてびっくり、すでに出来ちゃってるよアレ。俺は緊張して失敗しながらも頑張る若人の姿を見たかったんだよ、すでに決着が決まってるもん見てもこういうのはしょうがないだろ」

「ふむ……しかし、お前デートなんてほとんどしたことないだろ。その資料とかはなんなんだ？お前がアニメゲーム関係以外の雑誌を持つてることなんてないだろうし」

「ああ、PCの中にいっぱい入ってるやつとか、あとときめ……」
「いい、やっぱり言わなくていい」

そう言っただけから資料を取り出そうとする俺を止めて神は頭を抱え出した。

熱中症か？

まあ、でもこのまま素直に進んでいくのは詰まらんことこの上ない。

こうなったら、直接手を加えるしかない！

「よし、次はイグニッションしてアビで恐怖演出だ！」

「ぶっ！？お前、一般人にアビを使うのか！」

さすがにびっくりしたのか飲んでたジュースを噴き出して立ち上がった。

普通そうだよねえ、わかるわかる。

「安心しろ、ダークハンドとか使っただけで怪しい影演出するだけだから別に当てたりしないって」

「当たったら普通の人は死ぬから……」

まだ少し不安に思ってるのか心配そうな表情を浮かべる神は置いといて、俺はさっそくイグニッションをして闇纏いを発動した。

次の予定はミラーハウス。

鏡の中で謎の手が襲いかかってくるのを見て成都君はどう動くかな？

くっくっく、楽しみだぜ

昼食を終え、早速手なんか握りやがってこんチキショウな二人を

尾行する。

さてさてどんな驚かせ方をしようかなとルンルン気分歩いていくと、

「……ん？」

後ろで神が首をひねっていた。

「どうした？」

「いや、この方向だとミラーハウス行かないぞ」

「へ？」

その言葉に思わず振り返って神の持っているパンフレットに載った地図を覗きこんだ。

「方向が逆だ。遠回りというのもおかしいくらいに」

「でも俺の渡した計画表じゃあ次はミラー……」

そこで俺は言葉を詰まらせた。

だって、明らかに自己主張の激しい何かが見えてきてるから。

周りには観覧車とかゴーカートとかあったけどその建物の纏うオーラだけが違っていた。

どす黒いっていうか邪悪っていうか絶対近付いちゃだめっていうか。

看板には三角をつけて不気味ににやけた白い着物の女性の絵があった。

そこに書いてある文字を視線にその文字が入るのを拒否している俺の目の代わりに神がぼつりとその文字を読んだ。

「……お化け屋敷、だな」

そう、お化け屋敷。

……… チョットマツテ。

冗談ではない！冗談ではない！！

自慢じゃないがお化け幽霊は大の苦手。

俺は最初から成都君のデートを覗く気満々だった、ゆえにこのような俺のデッドゾーンをわざわざ入れることはないあってはならないというか入れてたまるか。

俺は何度も成都君に渡した計画表のコピーを見なおした。

そこにはお化け屋敷なんていうおぞましい単語はどこにものってはいない。

「彼女さんがそういうの好きかなんかでの予定変更だな。まあすべて計画通りに行くわけではないからこういうのもあるだろ」

黒い鎧で顔が隠れているにもかかわらず青くなっていく俺を横にさも当然のごとく神はすたすと前に進もうとする。

え、行くの？

俺はすかさず神の肩を掴んで止めた。

「あのお、やっぱり次は少し休憩をはさんでからにしませんかねえ？」

「その休憩の間に面白いことが起きてたらどうする」

「お前だけで行けばいいじゃん！フリーパスも買ってるんだし！」

「お客さんとして入ったら彼らを尾行は出来んだろ。お前の闇纏いが必要だ」

「俺の精神が持ちません！！」

「そんなの知ったことか」

俺の魂の声が神の心を揺さぶることは1ミクロンもなく、神はすたすと俺を連れてお化け屋敷の中に入っていく。

ドウシテコウナッタ？

ドウシテコウナッタ！！！？？？

人の恋路は突入するものだ

ヒュ〜っと人工的な風の音、ドロドロとした音楽が鳴り、冷たい空気が肌を刺激して恐怖心をあおる。

すでにいくつかの仕掛けには遭遇しており、そのたびに凌駕して
るんじゃないでしょうかこれ

俺の心は限界だった。

「なんでこんな怖い思いわざわざしたがるのバカじゃないのアホなの死ぬの死んでよもういらないよこんな施設俺が壊して世界を平和にしてハッピーエンドでいいですかって遊園地の中心で愛を叫びたい」

「まだ入って十歩も歩いてないぞ……」

闇纏い発動中の俺の前を神が呆れながら進んでいる。

ビビってます、怖いです、無理です、帰りたいです、むしろ帰して！

能力発動のためにゴツイ鎧着ててこの姿が剣もってぶるぶる震えてるのがものすごく滑稽なのはわかってるけど、どうしても無理なのは無理なんですよ！

「どうしてこうなったどうしてこうなった……」

「うるさい。GTでゴーストと戦ってるだろ？似たようなものというか、そのままだろアレ」

「心構えとか色々あんだよ！それにこういうのってマジ物より人工物のほうが怖かったりするじゃん！」

「まあ、怖がらせるために作ってるからな」

ガタガタ震えている俺を無視するように神はすたすたと前に進んでいく。

やだなにこの人男らしい、あまりの周りの空気ガン無視っぷりに殺意がわいてくるわ。

どうやったたらあそこまでサクサク進めるのか。

「何をぶつぶつ言っている、見えたぞ」

神の言葉で我に返ると前方に少し離れたところに見知った顔のいちやいちゃカップルを発見。

なにやら例の女の子に頼られてる状況をうまく作ってるのか、女の子は成都君の腕をひしつとつかみ、成都君はそんな彼女に頼られてるせいかとでもかっこいい男の顔をしている。

「目標確認、そのキレイな顔を吹っ飛ばしてやるぜ」

「殺すな」

バレットインフェルノを放とうと胸部装甲を開こうとするも止められる、残念。

「ある程度近づくか、そうすればどれくらい進展したかもわかるかな。だがびっくりしても声はださ……」

ガシャンッ！！

神が喋ってる最中に先行している二人が罫を発動させてお化けの人形が飛び出してきた。

なにやら「大丈夫ですよ、僕が付いてますから」と男らしい言葉が聞こえてきて腕を組んだ二人はさっさと先に進んでいく。

ちなみにこちらの二人組はというと……

「……………」

「……………」

体全体をガタガタ震わせながら一步も動こうとしないゴツイ黒甲胄とそれに腕をつかまれて前に動きたくても動けない青髪好青年。

好青年が無理やり前に行こうとしてもまるで大岩のようにピクリともその場から動こうとしない、というか動かない。

「……………」

そんな呆れた視線を俺に送るんじゃない、自分でも呆れてるんだから。

でも動けない者は動けないのよ!?

それでも成都君を追いかけたい一心で俺は何とか足を進める。

気合で何とかできるものだと思います、その時の俺は目をつむっ

て片耳ふさいでもう片方の手を神に引っ張ってもらっている状態。
さながらお母さんに手を引いてもらってる小学生のような。

……笑いたきゃ笑え。

「む、追いついたぞ」

もうどんだけ長いんだよこのお化け屋敷、直線コース行くために壁ぶっ壊すぞとか半分ブチ切れそうになっているときに神の声で目を開いた。

目の前にはさっきより距離が縮まっている成都君たち、成都君の腕に抱きついていて彼女は明らかに頼もしい成都君を見上げながら顔を赤く染めている。

確実にフラグが立っておられます。

他人の幸福って自分が不幸だとより輝いて見える。

その輝きが強ければ強いほど心に生まれる感情って知ってるかい？
殺意っていうんだぜ。

「よし、もういい。この仲ぶち壊してもいいからダークハンド使って邪悪演出しちまおうギリギリで当たらないようにするけど当たったら事故ということ許してくれるよね許さなくても殺っちまうがな」

「逆切れして八つ当たりして走った！？って、待て、そこは……！」

限界を超えた恐怖で逆切れ状態になっていた俺は神の止めを無視して成都君たちに近づいた。

バスンツ

前に出た瞬間床がカクンと少し下がったように感じたと同時に、天井から黒い布きれが襲いかかってきた。

それは俺の顔面すれすれで見事に止まって衝突することはなかった。

一瞬何が来たのか気づかなかったが、闇に溶けるような黒い髪、異常なまでに白い肌、ぎよろりと見開きながらまっすぐこちらを見つめる目、それらが俺の視界に広がっていた。

神からの視点では天井からぶら下がったお化け人形が0距離で俺

雲幻の最後は弄られるもの

月曜日、昼休みに満面の笑顔の成都君がやってきた。

結果がどうなったかはその顔を見ればわかる。

「雲幻先輩、本当にありがとうございました！このご恩は一生忘れません！……って、先輩、その怪我はいつたい」

「あーあー、気にするな。ちょっと昨日いろいろあったんだよ」
俺は包帯が巻かれた腕をひらひら振りながら成都君に言った。

土曜日に成都君尾行、日曜日にGT探索という名の処刑、そしてその傷のまま翌日学校って……まるで戦争があったかのようなハードスケジュールだな。

いや、まあ俺のせいなんだけど。

ちなみに今の俺の姿はというと普段の私服だが体中の至る所に包帯が巻かれた重傷人状態。

俺だけにゴッドウィンドファントム全弾使い切るとか馬鹿なの？死ぬよ？

「先輩も大変だったんですね。僕の方もデート中にお化け屋敷はいつてたらいきなり老朽化した部分が崩れ出したらしくって大変でしたよ。でもその時怖がってた彼女を支えてたらその部分で男らしくてかっこいいって言われてあっちから告白してもらえました」
「アー、ソレハ良カツタネ」

あまり触れてほしくない部分をいきなり話題にされてどうしようか言葉に迷った。

まさかあの行動がそんなことになっていようとは……ありがとうございます世界結界、お疲れ様世界結界。

しかしなんだろうな、幸せオーラが強すぎてむしろ今はあほらしく見えてしょうがない。

バカッブルって片方しかいなくてもオーラを放つんだな。

「本当にありがとうございました、先輩がデートを押ししてくれなか

「だったらここまでうまくはいかなかったと思います」

「はいはい、持ち上げ過ぎだから気にするな。結局最後に行動したのは君だし、結果を作り出したのも君なんだから。これからはもっと自信をもって行動すればもっといいことあるよ」

「はい、がんばります！」

とりあえずなんかそれっぽいことを適当に言つと成都君はまた深々とお辞儀をしながら去って行った。

一応真面目には対応したけど、途中で遊び半分になってたのは申し訳なく思うくらいに真面目な子だった。

「というか、遊び半分で様子見に言ったから天罰で今ぐるぐる巻きなのかねえ。」

「やれやれ、とため息をつきながら昼飯時に買った紙パックのジュースを飲みながら俺は外を見た。」

「今日も空は青く雲が漂っている。」

「何も変わらない、変わっているようには見えない。」

「けどこの1分1秒、今もどこかで闇は動いている。」

「この日常がこれからも続いていくのか、それとも最後なのか。」

「今も俺たちはその結果を求める過程の中を生きている。」

「なぐんて言つて終わるとでも思ったか!？」

「ここは俺が設立した結社Ksメンバーの溜まり場兼俺の住処であ

る建物の近くにある広場。

俺はさっそくイグニッションした姿で元凶の前に立ちはだかった。た。

そいつはめんどくさそうに眼を半開きにしながらこっちを見ている。

昂式玖真子、成都君に変なことを吹き込んだ張本人だ。

「だいたい、お前が言わなければ俺はこんな目に合わなかったんだぞ!？」

「なにそれ、責任転換? 小さい男ね……」

あくびしながら頭を掻いてる……明らかに舐め腐ってやがるこのアマ。

「うっさい! 今回は俺がお灸をすえてやがるぜ!！」

俺は右腕に装着したシールド型のバンカーを構えた。

別にアビで強化してないが当たると痛い。

具体的には玖真子のHPは半分近く減るくらい痛い。

それでも玖真子は余裕な雰囲気を目の前に立っている、というかイグニッションもしていない。

「っておい、イグニッションしろよ!？」

「いや、私する意味ないし。勝手に怒って勝手にイグニッションしてるのあんただし。イグニッションしてない相手に攻撃する性格じゃないでしょ、だったらしない方が安全じゃない?」

ぐ、まったくもって正しい意見です。

「それに、私あんたがなんでそんな気が立ってるかわからないんだけど?」

「うるさい、お前が成都君に俺のこと変に教えたせいでいろいろ大変だったんだぞ!？」

「ふん……」

そこでなぜか玖真子は不敵な笑みを浮かべた。

え、なにこと?

「どう大変だったのか教えてもらっていい?」

「い、いや、知らなくていいから俺にぶちのめされる」

「いや、それはひどいから……まあ、たとえば」

玖真子は笑みを崩さずに俺のところ近づいてきて耳元でぼそりとつぶやいた。

「能力つかって一般生徒尾行したり」

ぎく。

「ついでに驚かせようとしたり」

ぎくぎく。

「イグニッションして建物壊したりい〜？」

ぎくぎくぎくう！！！！

「あつれ〜、どうしたんですかあ〜？く・ま・せ・ん・ぱ・い」

自分でも冷や汗だらだら流して鎧越しでもがちがちに固まってしまっていることがわかる。

そしてこいつがすごく憎たらしい笑顔でこちらを覗き込んでいるのがものすごく腹立たしい！

なので俺は、

「だからどうした!？」

開き直った。

「確かに俺はそれに近いことは行ったかもしれん！だがお前だけの証言ではちゃんとした証拠にはならない！そんな煙も立たん火には何の意味もないわ!」

俺はふんぞり返って玖真子に言い返してやった。

問題があるとすれば俺の周りにいる大半のやつが煙も立たない火を全力でキャンプファイヤー並に燃え上がらせる奴らばっかだということなんだが、ここで玖真子に口で負けるのは何となく嫌なため堂々とした態度を取っておく。

弄れないと分かったならすぐにテキストなものとはいえ『ごめんなさい』の一言くらいは言うはず。

そんな考えとは裏腹に玖真子の笑みはまだ崩れはしなかった。

むしろ大笑いをするのをこらえる歪んだ笑顔になっている。

「そう……じゃあこれは？」

そういつて取り出された1枚の写s……………ん？

「こ、これはああああ……………」

「ッ！！！！？」

もう途中から叫び声にならない声を上げていた。

というかもう意味が分かりませんでした。

だってあの遊園地での活動はほとんどイグニッション状態の闇纏い状態で行っていたんだから今までの玖真子の発言からして尾行していた俺を発見していたとしよう。

けど闇纏い状態なら写真にとることなど不可能、証拠もない。

そう思っていた時期が……僕にはありません。

「闇纏い状態、じゃない写真ならここにあるけど？」

そういつて他にも数枚の写真をじゃらんとトランプのように手で広げて見せた。

そう、そこにはイグニッション状態ではない俺の写真……………メイド服を着ている俺の写真があった。

しかも神と腕組んでる状態の。

「いやあ、雲幻にこんな趣味があったなんて思わなかったわ……………

…で、私に何の用だっけ？」

「……………何モアリマセン」

……………完全敗北。

俺はずしーんとorzになってその場でへこんだ。

「じゃあ、私もこのことは知らない。OK？」

「……………OKです」

それじゃあね、といつて玖真子は笑いながらその場を去って行った。

俺はしばらくそこから動くことが出来なかった。

成都君の計画変更に振り回され、神には制裁され、玖真子には弱み掴まれ……………

「ちきしょう……………結局、俺どこでもだれでもこういう結果になるの

かあああああああああああああああああ！……！！」

そう叫びながらも『くまーだからさ』という、知り合いたちの
声が聞こえた気がした。

いや、きつともつとひどいこと言ってくるな、うん（あ

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7238p/>

銀雨 昂式雲幻物語 『人の恋路を邪魔するなんて許せない！でも見るだけな

2011年8月26日03時11分発行